

町長発！『がんばるトーク』

町長 上川 元張



皆さんは作家・松本薫さんをご存じですか？米子市在住で、日野三部作とされる「天の蜩―十七夜物語」・「TATARU」・「日南X」や、市民シネマとして映画化された「梨の花は春の雪」などの作者で、県西部を拠点にご活躍の郷土作家として知られています。

そんな松本さんが今、若桜鬼ヶ城を舞台とする小説を執筆中です。県東部が舞台となるのは初です。そもそものご縁は、文化情報誌「さんいんキラリ」（令和6年春号）の「オトナのキラリ旅」のコーナーの取材で若桜を来訪されたことです。若桜鉄道で来町され、カリヤ通りと蔵通り、若桜神社と江嶋神社、落折と不動院岩屋堂など若桜を代表する観光スポットを巡り、町内の飲食店や特産品事業者を丁寧に取材し、若桜の魅力を幅広く紹介されています。紀行文としてはもとより、観光情報としても秀逸なものです。

掲載からしばらくして、松本さんが次の小説の舞台として若桜に関心をお持ちだと知人から伝え聞き、これはアタックするしかないと思いました。ただ、松本さんの小説を読んだことのない私は、まずは読んでからと、戦国期の江尾城を舞台に尼子・毛利の攻防を描いた「天の蜩」と、大正から昭和初期に中央文壇で活躍し

た日野町出身の文豪・生田長江の生涯を描いた最新作「火口に立つ」の二冊を立て続けに読みました。時代設定やテーマは異なるものの、いずれの作品も緻密な取材に裏打ちされたリアリティと、私たちと等身大の生身の人間を描きつつ、いつの間にか壮大な人間ドラマとして展開していく作品の構成力に引き込まれ、約500ページに及ぶ長編を読み終えたとき、じんわりと静かな感動を覚えました。同時に、松本さんが若桜をどう描かれるのか読んでみたいという思いが強くなりました。

令和6年9月に鳥取市内で開催された松本さんの講演会を聴く機会を得て、終了後、知人の紹介により、カフェで関係者と歓談中の松本さんを訪ね、小説の執筆をお願いしたところ、快く引き受けていただき、構想が動き始めました。何度か打合せを行い、小説のテーマは、明治の大火を乗り越えた若桜宿の近代史などいくつかの候補の中から、戦国期の若桜鬼ヶ城に決まりました。そして令和7年3月定例会で関連予算を議決いただき、事業が正式にスタートしました。若桜鬼ヶ城に関する現存資料は少ないですが、松本さんは執筆に向けて5日間滞在し、町内をほぼくまなく回って若桜の土地や自



▲松本薫先生を囲む会

然、人や風土を体感し、郷土史に詳しい方々からの間取りなど入念に取材を重ね、小説の着想を固めていかれたようです。

松本さんは、歴史小説を書く時は、英雄ではなく、時代の荒波に翻弄されながらも懸命に生きる普通人を描くのが信条だとおっしゃいます。今回の作品でも、尼子・毛利・織田の攻防の舞台となった戦国期の鬼ヶ城下で、城主が交代してもしたたかに生き抜いていく庶民の様子を生き生きと描いています。ネタバレしないよう、ここまでにしておきます。

執筆も最終盤を迎え、3月下旬には、「さんいんキラリ」の取材でご縁のある町内事業者の方々にも参加いただいて、松本さんを囲む会を開催し、出版に向けた気運を盛り上げました。今年秋には若桜町観光協会から出版される予定です。松本さんの小説を通して若桜鬼ヶ城の魅力が多くの方々へ伝えることを期待しています。皆さんも完成をどうぞお楽しみに。